

2006年度大須オペラ，メイヤック&アレヴィ作「青ひげ」 台本翻訳（下）

— 名古屋における演劇社会学の試み資料編

The Latter Part of the Translation of Meilhac & Halévy's Barbe-Bleue Prepared for the Ôsu Opera Performance by Super-Ichiza in 2006: Documents for the Sociology of Theater in Nagoya

鎌田 大資 訳

Daisuke KAMADA (translator)

第2幕 第2景 錬金術師の穴倉¹

（地下の広い部屋。ポポラーニの実験室。炉，（蒸留用のつのの生えた）レトルト（Cornues）。舞台中央奥に，観客に面と向かって，一連の墓碑銘を掲げた大きな霊廟がしつらえてある。「エロイーズ，ここに眠る。—ロザリンド，ここに眠る。—エレオノール，ここに眠る。—ブランシュ，ここに眠る。—イゾール，ここに眠る。」—下手に，仮眠用の寝台。上手に，テーブル。—奥の下手の方に出入り口の戸口，上手前景にもう一つの戸口がある。）

第1場 ポポラーニ，一人。

昨日は快晴だったが，今日はひどい天気じゃわい。昨日は3回も空模様を観察し

た…3回も，確かに，火星が顕著に金星に近づいておると確認できたわい…そのことをとやかく言うつもりはないが，天体の言葉を解する者には，お告げの言葉がわかったはずじゃ。そのお告げとは，これから8日間に，わしがあるじを止めなければ，青ひげ公その人がわしの息の根を止めるじゃろうということじゃ…今日の嵐のお告げによれば，わしは急いの方がよい…ためらっている場合ではないぞ…わがあるじを止めるのじゃ。それに，あの方はならず者じゃて，あの方が没落なされば，わしは正直な人間の仲間に戻れるというものじゃ。（角笛の音が聞こえる。）ありゃ何じゃ…青ひげ公の角笛じゃというのか…いや，廊下を渡る風の音じゃ。（ポポラーニは再び話を続ける。）5人もの女がすでにここに入った…犯した罪すべてがわしの良心を責めさいなむ…新たな罪で手を汚したくはない。前の5人で十分報いはうけたのじゃから，6人目に手をかける必要はないぞ…正直者として暮らすだけの余裕はある…ああ！神よ！ よき行いとは何ですか…飽

¹ 上編（Meilhac & Halévy n.d. [1900-1902]=2018）からの続き。原作pp.289-345を訳出。本稿文中のカッコ類の使用法は，上編に準ずる。〔 〕内は翻訳者の訳文選定の判断のぶれを表すなど。一目瞭然と思ひ，特に上編でも注記しなかったが，（ ）内には原作の表記通りの訳文と，訳者の心覚え的な原語の書きぬぎが混在する。また上編も翻訳であり，鎌田は訳者という位置づけにとどまる。タイトルに翻訳と謳い原作を明記していたものの，鎌田自身の論考であるかのように受けとられかねない書式を採用していたことをお詫びします。

きたりるということにすぎないのでしょ
うか…嘆かわしい、嘆かわしいことだ！
…(また別の角笛の音、以前より近づい
ている)いや違う、腑に落ちないな。あ
りゃ青ひげの角笛に違いない…あの方が
こちらに来られるのだ。来るぞ、来たぞ、
わしに何を頼みに来たのか…もうブー
ロットの番なのか、不幸なブーロットの
…

(奥の扉を3度叩く音。ポポラーニ、開け
に行く。青ひげがあらわれる。たいまつ
をもつ二人の武装した男が先導する。)

第2場 ポポラーニ、青ひげ

ポポラーニ (お辞儀) わが君…

青ひげ (ぶっきらぼうに。第2景ではずっと
この調子) おぬし、一人か。

ポポラーニ (陰気に) いつも一人でござい
ますわい！

青ひげ (武装した男たちに) 行け、兵ども
よ！(武装した男たち奥から退場。ポポ
ラーニに) おぬしの毒を特急仕上げで用
意せよ。

ポポラーニ どうなさるのですか。

青ひげ 分からぬか…女が来るのだ。

ポポラーニ (独り言) わしの言った通り
じゃ！…(大きな声で) ああ！わが君…

青ひげ 忠告か！…忠告には我慢できぬ、そ
れに耳を貸す時間があつたとしても…だ
が、その時間がわしにはないのだ…今宵
真夜中にボベシュ王の娘を妻にめとらね
ばならぬのだ。

ポポラーニ 真夜中ですと。

青ひげ 遅くとも12時15分までにじゃ…それ
にもう10時半じゃ…無駄にできる時間
はないぞ、分かるな。

ポポラーニ だんだん強烈に分かってまいり
ました！…

青ひげ 矛盾したことを言うわけではない…

だが、わしのモットー [座右の銘] はこ
うじゃ。いつでもやもめ、それでも全然
やもめじゃない！…存じておろう、誰か
モットーを口にするときは…

ポポラーニ (独り言) 星もその文句を申し
ておるとか…この方を止めなければ…わ
しの息の根を止められる！

青ひげ 話が聞こえとらんのか。

ポポラーニ (懇願する) もう1度、お話し
くだされ…

青ひげ おぬしの毒を特急仕上げで頼むの
じゃ！…命令に従え…これ以上ないほ
ど、わしは焦っておる。

ポポラーニ ご命令に従います、わが君。(上
手に退場。)

第3場 青ひげ (一人、霊廟を見ながら)

恋歌

ここに5人の女の墓がある、この上なく
わしを愛してくれた者たちよ！

眠れ、安らかに静かに、哀れな者たちよ、
わしはそちらの眠りをさまたげぬ！

これで5人か！…おお、人の定めよ！
何！もう5人か！…5人の天使が消えうせ
た！

半ダースには一人足りぬ…もうじき、足
りぬ分を足してやる！

(奥からブーロット、二人の武装した男
たちに導かれて入場。男たちはブーロッ
トを連れてきて退場。)

第4場 青ひげ、ブーロット

ブーロット 何だよ、どういう意味なのよ…
夜の10時にもなってピクニックなんて…
嵐に雷、稲光のなかを突っきつて、早が
けで、馬車で散歩なんて…どこに行く
のかと尋ねてもあなた様は黙ったきり、

この塔の階段をあなたの兵に連れられて1段1段おりてきたよ…この階段ときたらねずみでいっぱい…（青ひげが動く。）違うとは言わせないよ！…降りてくるあいだも、ねずみがあたしの足のあいだを走りまわるのを感じたのよ。

青ひげ 気をつけなさい、ブーロット殿…（強調して）わが6番目の妻よ！

ブーロット それどういうことなのよ。

青ひげ（ブーロットの手を取り）字は読めますかな、奥よ。

ブーロット そりゃあ！ 大きな字で書いてありゃあ…

青ひげ ならば、読みなさい。（霊廟のまえにつれてくる）

ブーロット（碑銘を読む）「エロイーズ、ここに眠る。青ひげ公の高貴にして権勢を誇った妻であった！…」（恐れて）行きましょ！

青ひげ（ブーロットを引きとめて）まだ、全部、読んでおらぬぞ。

ブーロット（読む）「ロザリンド、ここに眠る。エレオノール、ここに眠る。ブランシュ」行きましょ！…ここを出ましょ！

青ひげ（ブーロットの手を押さえ）もっと読みなさい、奥よ…「ブランシュ、ここに眠る。イゾール、ここに眠る…」そしてこの最後の名前の下には何とかいてあるかな。

ブーロット 何もないわよ。

青ひげ 何もないか、本当だね。じゃが！明日には…

ブーロット 明日…

青ひげ 明日にはそなたにも読めるじゃろう…「ブーロット、ここに眠る」とな。

ブーロット（びっくりして）出ましようよ！（逃げようとして奥の扉に体当たりするが、閉まっていると分かる。）

青ひげ（笑いながら）行かれるがよい！…はっはあ！

ブーロット そんな風に笑わないでよ、怖いじゃないの！

青ひげ ああ！ おわりのようだな…そなたが死ぬことになると、わかったなあ！

ブーロット 死ぬって…そんなのいやよ！

青ひげ（やさしく）お馬鹿ちゃんだねえ、そんなことを言って！ よく知っておるぞよ、そなたが望んでおらぬことは…じゃが…

二重唱

青ひげ（霊廟を指しながら）そなたはこの記念碑を見たな、

またこの恐ろしい石に刻まれた名を読んだな！

この屋敷の中で、5つの部屋はもうそなたの5人の先輩が使っておる…

じゃが、6番目の部屋は空いている！

ブーロット で、わが君、あなたはわたしに6番目の部屋に入っていかせたいのね！

青ひげ 琥珀のように鋭いそなた…大当たりじゃ！

ブーロット 死ぬなんて！…怖いわ！…

青ひげ（荒々しく）気がとがめることはないか…

探す気になれば、理由がわかる、なぜ死ぬことになるか！

ブーロット どんなに賢い娘でも、いつも何か悔やむことはあるよ。

あたしは2つ悔いがある…それ以上ではないけれど。

どうしてあたしは死ななけりゃならないのさ。

小唄

1, ある日突然、ピエールがあらわれて、あ

たしの唇を奪ったのよ…

あたし叫ぶべきだったわ、認めるわ、あたしも自分で身を守るべきだったの…でも知らなかったのよ…それが1つ目よ!

青ひげ おやまあ! それは知らなんだ。

ブーロット ああ!あ! ご存じなかったのね…きっとそのせいで死ぬんだわ!

2, 2人目は村のイケ面, 口のうまいやつさ! …でも信じていいけど, あたしと結婚の約束しなければ, 何にもさせないところだったのさ!

青ひげ おやまあ! それは知らなんだ。

ブーロット ああ!あ! ご存じなかったのね…きっとそのせいで死ぬんだわ!

3, 要するに, 告白するけど, もう死ぬってときに自慢はだめね。バラの女王にしてもらったけど, そのバラは根っこから抜かれちまう運命だったってわけね。

青ひげ おやまあ! それは知らなんだ。

ブーロット ああ!あ! ご存じなかったのね…きっとそのせいで死ぬんだわ!

青ひげ その理由だろうが他のことだろうが, 片をつけにゃなるまい…お前, 死ぬんだよ!

ブーロット 何よ, 死ぬなんて。

青ひげ 死なにゃならん!

ブーロット 何で, 死ぬの。

青ひげ 愛してるからさ, この上なく, 金髪のかわい子ちゃん, そいつをどうしてもおれの7番目の妻にしたいのだ! それが理由さ。

ブーロット 何よ, 死ぬなんて。

青ひげ 死ぬんだよ, お前!

ブーロット いやよ, あたし!

(セリフで) 死ぬなんて! …(ひざを付いてくず折れる)

青ひげ (セリフで) 死ぬのだ! …

ブーロット (懇願して) こん畜生, あたしの若さ, 涙, か弱さで, ほろっとくるはずさ! (立ちあがる) あたしのお願い聞いて, 血を好むお方, あたし死にたくないの!

青ひげ (聞いていない) 新たな恋! 美女を取りかえる, 8日ごとに取りかえるのだ!

人が何と言おうと, それがわがモットー! 恋よ, 短く燃えよ!

重唱

ブーロット こん畜生, あたしの若さ, 涙, か弱さで, など。

青ひげ 新たな恋! 美女を取りかえる, など。

青ひげ 桃よりおいしい, 春の日より汚れない,

ボベシュ王の城における16歳のあの子!

ブーロット その子を嫁にしたいのね, きっと。

青ひげ (陽気に) そうさ, 再婚したいのさ。

ブーロット (怒りくるい) ならず者! 卑怯者! 偽善者! 裏切り者!

青ひげ (冷静に) そなたには叫ぶ権利があるぞ。(外で激しい雷雨)

ブーロット (また立ちあがって) 天の怒りを恐れなさい!

青ひげ 天か…そりゃ大事なことだ!

ブーロット 雷が聞こえるかしら。

青ひげ いいとも! わしが雷よりも大きく

歌うまでさ！

重唱の繰り返し

ブーロット コン畜生，あたしの若さ，涙，
か弱さが，など。

青ひげ 新たな恋！ 美女を取り替える，な
ど。

(重唱の終わりに，雷がとどろき，ポポ
ラーニが上手から現れる。小瓶と，砂糖
水の入ったコップを持ち，それを揺りう
ごかしている。)

第5場 同，ポポラーニ

ポポラーニ ブツをもってまいりました。

ブーロット (叫びを上げ，ひざを突いて，く
ず折れる) ああ！…

青ひげ (ブーロットに) わかったか…お前
をここに置いていく！ 5分後に効果を
見に戻るぞ。

ブーロット (青ひげの足にすがり彼にしが
みつ) わが君！…

青ひげ (ブーロットを押しもどし) 5分だ
ぞ！ (ブーロットは手を突いてどさっと
倒れる。青ひげは振りむいて冷静に言
う。) そなた，気分でも悪いのか。

ブーロット (自然な調子で) あなたは気分
よさそうね。
(青ひげは奥から退場)

第6場 ブーロット，ポポラーニ

ブーロット (立ちあがり) ねえ，あんた，
あたしを殺さないでしょ！

ポポラーニ (ずっとコップと小瓶をもった
まま) 奥様…

ブーロット 奥様なんて呼ばないで…ブー
ロットって言ってよ，ブーロットちゃん
だよ！

ポポラーニ (困惑して) ブーロットちゃん

かね…

ブーロット いとしのかわいいブーロット
ちゃんだよ…大きなマロニエのお話を思
いだしてよ…

ポポラーニ そのお話はやめとくれ！

ブーロット そうじゃなくてそのお話をしよ
うよ！

ポポラーニ 思いだせないよ…思いだしたく
ないんだ…それに，おまえが物事を信じ
こませようとすりゃ…何も確かなことは
言えなくなっちゃう…

ブーロット あんたに平手打ちでお仕置きし
たからさ…でもあの時，そいつでお仕置
きしなけりゃ…

ポポラーニ ああ！ブーロット！

ブーロット あたしを殺せないって分かった
だろ！

ポポラーニ もしわしがお前を殺さなきゃ，
あの方はわしら2人とも殺しちゃう…そ
うなりゃ，あんたにも得はしないし，わ
しのほうじゃ大損だ。

ブーロット でも，それじゃ悪魔だろ。

ポポラーニ いや…生まれつきが悪いという
より…あの方は悪い病気だ…そういう人
には手の施しようがないのさ。

ブーロット 悪い病気…どんな病気さ…

ポポラーニ 再婚し続けたいっていう病気さ
…さあ，それ，よいしょ！…急げ，急げ
… (ブーロットにコップと小瓶を見せ
る。)

ブーロット よくそんな度胸が出たね…

ポポラーニ あんたが死ぬのを見る度胸かい
…そんなもなあ，ないよ！…まあ，こう
してみたんだ…聞きなよ…わしの言うこ
とを聞いて分かってくれよ… (コップを
持ちあげる) ここに砂糖水の入ったコッ
プがある…

ブーロット (機械のように繰り返す) 砂糖

水の入ったコップね…
ポポラーニ 振らなくてもいいよ…砂糖は溶けておる…さて。こっちの小瓶には、毒が入ってる…分かるかね…毒だ…あんたはこの小瓶を取りあげる…あんたがだよ…で、コップにつぐんだ…
ブーロット (麻痺したように) あたしが…
ポポラーニ そう、あんたがじゃ…
ブーロット (同じく) はい!…はい!
ポポラーニ それから、飲みなされ。
ブーロット (同じく) はい…はい…飲むのね。
ポポラーニ そうすると今度は、わしが背を向ける…わしはそんなことにかかわりあいたくないんじゃ…お分りかね…
ブーロット はいよ…はいよ…何でもないとだね…もう1回言ってよ…
ポポラーニ ここに砂糖水の入ったコップがある…
ブーロット 振らなくてもいいと…
ポポラーニ 砂糖は溶けておる…
ブーロット こっちの小瓶には…
ポポラーニ 小瓶には毒が入ってる…
ブーロット 小瓶のなかには毒と…
ポポラーニ これでさっきのところに戻ってきたよ…あんたが小瓶を取る。
ブーロット 毒をコップにつぐ…
ポポラーニ わしは背を向ける…
ブーロット 見てはいない。
ポポラーニ その通り。
ブーロット (コップと小瓶を取りあげ) 分かった!…分かったわ!…(上手へ行く)
ポポラーニ さあ、用意はいいかな。
ブーロット いいわよ。(ポポラーニ、背を向ける。ブーロットは楽しげに小瓶のなかのものを捨てて、砂糖水を飲む。) できた!…ああ!できたわ!(小瓶をテーブルに置く。)

ポポラーニ (振り返り) 飲んだか。
ブーロット 飲んだわ!(笑って)でも、小瓶は飲んでない!
ポポラーニ (大笑い) 女たちはみんなこの手で引っかけたんじゃ!…馬鹿女め!
ブーロット (話に割りこみ) 何なの。
ポポラーニ 毒はコップの水の方だとは気づかなかったのか。
ブーロット (叫びを上げる) きゃあ!
ポポラーニ (笑う) 小瓶の方が、何でもなかったのだ。
ブーロット (第2の叫びを上げる) きょへえ!…(コップを落とす。—不安をこめ) それじゃ、これで一丁あがりってわけ。
ポポラーニ そうとも…薬の効き目を感じないか…
ブーロット やられた…効いてきたわ…(下手に行く。)
ブーロット あありゃ! こおりゃ!
やられたわ! 変な気分よ、死んじまうのよ!(仮眠用の寝台にくず折れる。)
ポポラーニ これでよし!これでよし!
ブーロット これが死ぬってことなの。ありえないわ!…
死ななきゃならないときは息が切れるはず!
ポポラーニ わしは物わかりのよい化学者だから、わしの毒で息は切れないのじゃ。
ブーロット (寝台の上に横たわる) あありゃ! こおりゃ!
やられたわ! 変な気分よ、死んじまうのよ!(死ぬ)
ポポラーニ よし…一丁上がりだ!
(奥から青ひげ登場。)

第7場 ブーロット、ポポラーニ、青ひげ

青ひげ うまく行ったか。

ポポラーニ できました！ 女はくたばりましたぜ、哀れなやつめ。

青ひげ (セリフで) 殺ったか。

ポポラーニ 殺りましたぜ！

(青ひげはブーロットから結婚指輪を抜きとる。)

青ひげ (冷静に) 後悔すべきところだろうが、今そんなものはありません、

もう行くぞ、喜びの歌を歌いながら。

(繰り返しを歌いなおす) 新たな恋！ 美女を取りかえる、8日ごとに取りかえるのだ！

人が何と言おうと、それがわがモットー！ 恋よ、短く燃えよ！

(奥から退場。外でも繰り返しを歌っているのが聞こえつづける。)

第8場 ブーロット、ポポラーニ

(ブーロットが寝台の上でのびているのをポポラーニは眺める。青ひげの繰り返しが遠くなり聞こえなくなる。)

ポポラーニ あの方にいいところがあるとすりゃあ、何でも陽気に取るところだな！ …それにありゃあ、声もいいねえ…さあ、行っちゃったぞ、今度は真面目にやるぞ… (ブーロットのところに戻り彼女を眺める。) かわいそうなブーロット！ この子が相手じゃ他の女を相手にするより、わたしには痛手が大きいわい、何しろ前から知っとる娘じゃからのう…さあ、楽しい物理の実験をちょっとばかりな！ … (ずっとしゃべりながら、小さな電気じかけの機械を取ってきてテーブルに乗せる。) ちょっとまえにあの子がわたしに思いださせてくれたのはまさに…大きなマロニエの話だわい…あの子は農家の娘

で…わしはと言えば…もっとも冷酷な占星術師も1回のキスで20も彗星を出してくれるような、そんな時に当たっておったのじゃ…あの子が実際、平手打ちを食わさなかったら、結構うまく行ったかもしれない…もっとも、まったくの冗談だったんだが…わしらは笑った…笑ってばかりいたね… (電線を取りブーロットの手に握らせる。) これはわしの発明だ…効き目は満点！… (ブーロットの手を見て) きれいな手だ…かわいいね…ほんとかわいい…しかし、大きなマロニエの木の下ではごつい手だった…えらいごつい…目から火花が出る平手打ちだった… (ブーロットにキスする。) さあ…後はほっといてもうまくいくさ！… (機械のところに戻り、ポケットから大きなスカーフを出して広げ、電気じかけの機械にかぶせる。そしてそのスカーフの下に自分の頭も入れて写真家がモデルを眺めるようにブーロットを眺める。用意できると機械のクランクを回す。鳥風琴 [鳥に歌を教える道具] が聞こえる。) 音楽にあわせて動くんだ…この方が陽気だぞ。

(霊力の力を受けて、ブーロットは動きはじめる。)

ブーロット (揺れながら) あれれ！…

ポポラーニ (ずっと回しながら) 止まるなよ！

ブーロット (どんどん大きく揺れうごく) あれ！あれれ！…

ポポラーニ 動くぞ！…動くぞ！ (ずっと回しつづける)

ブーロット こんにゃろう！…もうやめなよ！

ポポラーニ 火花が見えるか…見えるか

ブーロット 母さま！…母さま！…

ポポラーニ 動くなよって、言ったろう…（回しながら）ほら！…ほれ！…

ブーロット （地面に飛びおり）これ何よ。

ポポラーニ いのちじゃ！

ブーロット 何て言ったの…

ポポラーニ 「いのちじゃ！」と言ったのじゃ

ブーロット （呆然として）いのちね…

ポポラーニ そうじゃ！（ブーロットはずっとコードを握っていたが、それをポポラーニに返す。二人とも電気で激しくしびれる。）これで収まった。（コードを機械に戻す。）

ブーロット わたしは死んでないってことなの。

ポポラーニ 死んでませんぞ！

ブーロット （抱きあって）ポポラーニ！…

ポポラーニ （抱きあって）ブーロット！…

ブーロット （上手に行く）でもさっき言ってたわね…コップのなかの毒のこと…

ポポラーニ 毒ではない…睡眠薬じゃ…死ぬのではなく…眠るのじゃ…

ブーロット 眠る…

ポポラーニ そうじゃ、さっきは眠っておった…今は目覚めておる。小さな機械の動きでね。

ブーロット ほんとでしようね、まったく。

ポポラーニ わしがお前にそんな悪ふざけをするとも思っておったのか。

ブーロット それじゃ、死んでないのね…死んでないのね…

ポポラーニ 青ひげの他の5人の妻同様、死んどらん。

ブーロット 他の奥さんも…

ポポラーニ あんた、奥さん方が死んだと…思ってたのか…

ブーロット うん…信じてた。

ポポラーニ 間違いもあるさ…こころの底ではこの世でわしほどよい人間もおらんぞ

…真心あふれるポポラーニ、真心あふれ…電気もあふれ！…青ひげ公が最初の妻を殺すようにわしに命じてから3年になる…あれはエロイズだった…わしも人間じゃ。30分くらいしか死んでいない薬を与えて、自分を満足させた…あの方の意識が戻ったとき、わしはちょっとばかり近づいてこんな言葉をかけた。「かわいい子猫ちゃん。よくお聞き…今度は本当にまた死んじまいたいかな、それともポボルじいちゃんにやさしくするって言うてくれるかどっちだい…それでちょろつとベジーグ (Besigue) [トランプのゲーム]でも付きあってくれるかね、シャルル6世とオデット²が楽しんだように…

ブーロット あんたそんなこと言ったのかい。

ポポラーニ 言いよる男がいれば、なびかぬ女がいるもんかね。

ブーロット （有頂天で）生きてる！…あたし生きてる！…ああ！命っていいねえ！…鳥の声！…花の香り！…朝の最初の食事！…昼には2度目の食事！…2時には3度目！…夜には4度目！…その後では、大きな木の下でダンスだよ！…——ああ！大きな木の下でダンスだよ！…（ダンスのステップを何歩か踏んで、立ちどまり、冷静に言う。）さあ、話を続けなよ。

ポポラーニ そのベジーグの年の…年末には青ひげ公の新たな婚礼があり、新たな妻を殺すことになった…ここで2人を守る

² 唐突な歴史上の人物への言及。親愛王そして狂王と呼ばれたシャルル6世 (1368-1422) とその愛妾オデットがここで参照され、またシャルル6世の王妃、イザボー（英語読みではイザベラ）に似た名前のイゾールが匿われた5人の妻に含まれていることから、台本作成時にこうした人物像が想起され、ポベシュ王の宮廷の描写に反映された可能性が考えられる。

ことは、青ひげの怒りに立ちむかうことじゃ…しかしそれこそ人の道というもの！…打ちかつのは人の道じゃ！…そして、3番目の妻、4番目…5番目…そのたんびに人の道っていういたずら女がしゃしゃり出おってからに！…

ブーロット そうかい、でもねえ、あんたって人は、そう言いながら隅に置けない道楽者だよ！

ポポラーニ（無邪気に）何じゃと。

ブーロット つまりあんたのところに5人も妻がきたってんだろ。

ポポラーニ わしは思いやりのある人間なのじゃ。

ブーロット あたいの運命もわかったよ…あんた、あたいにもやさしくしろって頼むのかい…

ポポラーニ もしわしがあんたに頼んだとしたら…

ブーロット あんたのおかげでどぎまぎしちゃうだろうよ。

ポポラーニ よろしい！わし、あんたには頼まない。

ブーロット（ちょっと悔しさの混じった悪意のある驚き）ああ、そうかい！

ポポラーニ わしはまさに今夜、決心した。うち中の悪事を厄介ばらいするのだ…わしは王の足もとに身を投げだし、わがあるじの不誠実なおこないを告発するのだ。

ブーロット 一人で行くの。

ポポラーニ いや…犠牲者の女たちがわしと一緒に来るだろう。5人連れて行く心づもりだったが、6人連れて行くことになるな、それで全員だ。

ブーロット そうかい！ あたしが言うことを聞きたいかい…

ポポラーニ 言いなよ。

ブーロット あんたがあたしに頼んだことの方が、エロイズに頼んだことよりもあたしにはしっくり来るね。

ポポラーニ 復讐したいということかね。

ブーロット そうさ…それに、女たちの心の底に何があるか分かるかい…たぶん、それは別の気持ちだよ…あの人、素敵だったよ、畜生め！…ついさっき、歌っていたとき、あの人すばらしかったよ…（歌う）新たな恋！

ポポラーニ（後を引きついで恐ろしくひどく歌う）美女を取り替える！…

ブーロット 歌の心はつかんでるじゃないか。

ポポラーニ そりゃそうとも！…あの方が歌うのを聞くのは6回目だからな。

ブーロット ほんとだね…で、その5人の他の妻たちはどこにいるんだい。

ポポラーニ（霊廟を指して）そこじゃ！

ブーロット ぶるるる！…あのかなかで暮らすなんて楽しいとは思えないね！…こうなっちまって、みんな何ができるんだい。

ポポラーニ お前を待っているんじゃ。

ブーロット 何だって、あたしを待ってるって。

ポポラーニ そうとも…さっき女たちは、彼女らの…じゃなくてお前の夫の角笛を聞いた。青ひげ公がここに来る時には部屋がもう1つ必要になると、女たちはよく知っておるのじゃ。

ブーロット いつ、みんなに会えるんだい。

ポポラーニ すぐだよ、会いたければな！（下手の奥の壁に取りつけてあるボタンを押しに行く。次に上手に行く。）

第9場 同、5人の妻

（墓の戸口が開くと中が見える。たいそう豪華に装飾され家具の整った寝室。花、

杖つき大燭台(candélabres)、食事の整った食卓、その周りに5人の女が立ってグラスを手にはしている。

フィナーレ

5人の妻たち ようこそ、あのすばやい愛に燃える男の、6番目の奥さん!(舞台前面に出てくる。)

ブローット それもあのひどい男が、いつまでもあたしを愛すると、誓ったのが忘れられないうちだね!

妻たち ようこそ、いと気だかき姫よ、調和の取れた肉体美の女性よ! ようこそ、あのすばやい愛に燃える男の、6番目の奥さん!

ブローット(真んなかに出てくる、ポポラーニのところまで) そうね、とても早いわ、あのひどいやつったらあたしに8日間しかくれなかったんだから!

エロイーズ 8日なんて!…率直に言って短かすぎね…
あたしたちはもっと長く続いたものよ。

小唄

1、昔、1番最初に、この死の寝室に入ってきたのはあたし!
丸1年の間、あの人、あたしを甘やかしたわ、けだもの!
それが今じゃ、お、し、まい、終わり!
あたしをポポラーニに預けたの!

ポポラーニ あんたをポポラーニに預けたのじゃ!

エロイーズ いつも、いつも、ポポラーニだよ!

皆 いつも、いつも、ポポラーニだよ!

2、エレオノール

あたしもこの楽隊でパートを受けもってる、2番目の妻になったのはあたしだから!

イゾール あたしは3ヶ月しかもたなかったわ、90日よ…そのあとときたら…

エレオノール それが今じゃ、お、し、まい、終わり!

イゾール あたしたちをポポラーニに預けたの!

ポポラーニ あんたたちをポポラーニに預けたのじゃ!

エロイーズ いつも、いつも、ポポラーニだよ!

皆 いつも、いつも、ポポラーニだよ!

3、ロザリンド あたしは自分の番が来たので、身軽な足どりで、この道に駆けこんだの。

ブランシュ あたしはひと月しかもたなかったわ、たったのひと月、ねえ、それもたまたま2月だった。

ロザリンド それが今じゃ、お、し、まい、終わり!

ブランシュ あたしたちをポポラーニに預けたの!

ポポラーニ あんたたちをポポラーニに預けたのじゃ!

エロイーズ いつも、いつも、ポポラーニだよ!

皆 いつも、いつも、ポポラーニだよ!

ポポラーニ(エロイーズの近くまで行く) そんな風に、子猫ちゃんたちや、ポポラーニのことを言うのか。さて、感謝の気持ちを知らぬやつらだ!
じゃが、今日はわしはよき王様じゃ、こんなにひどく歌われたことに答えて、あんたたちに復讐させてあげよう、自由の身にしてあげよう!

皆 復讐だって。

ブーロット そうさ、復讐さ、自由の身にも
なれる！

ポポラーニ 復讐じゃ！

皆 ああ！ 復讐ね、自由の身にもなれる！

ブーロット 小唄

1, 死者よ、墓から出て、生きなおすのだ！
この暗い穴倉を出て、あたしについて来
な！

死者よ、墓から出て、生きなおすのだ！
陽気な生活、自由の身。

戦の、ときの声は、「復讐だ」ってやつさ。
裏切り者は自分にふさわしい踊りを踊ら
されるだろう！

皆 死者よ、墓から出て、生きなおすのだ！
陽気な生活、自由の身。

ブーロット 出発だ！ でもみんな、出発前
に、この陰気な丸天井に、
あたしらの楽しい歌を聞かせてやろう
よ！

皆 出発だ！ でもみんな、など。

2, ブーロット ここを出て、陽気に世間に
戻っていこう、
そして順番に楽しもう！
ここを出て、陽気に世間に戻っていこう、
いいものって言やあ、いい男だけだよ！
20歳の心があれば大好きだろ、あたした
ちだって、ねえみんな、心は20歳！

皆 ここを出て、陽気に世間に戻っていこ
う！ 陽気さ万歳、自由の身だ！

ブーロット 出発だ！ でもみんな、出発前
に、この陰気な丸天井に、
あたしらの楽しい歌を聞かせてやろう
よ！

皆 出発じゃ！ そう、出発じゃ！
(小器楽曲に乗せて、ポポラーニは奥の

扉を開き、身振りでも女たちが自分につい
てくるよう招く。女たちは喜びにあふれ
出発しようとする。幕が下りる。)

第3幕

ボベシュ王の城中、いとも豪勢な大広間。
宴のために煌々と灯りをともしている。
枝つき飾り燭台 (girandole) をもった彫
像がある。上手前景に長椅子。奥に大き
な窓があり、ゴシックの教会が見える。
その正面入り口とステンドグラスが輝い
ている。

第1場 王子、伯爵、ボベシュ、クレマンティ
ヌ、王女、家来たち、官女たち、小姓た
ち、やがて青ひげ

(王子と王女は婚礼の装い。幕が開くと、
12時の鐘がゆっくりと鳴る。)

合唱 (12時の鐘が鳴るのに合わせて)

1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11,
12！…

新郎新婦にしたがって、12時だ。

(外で鐘の音。2人の婚約者は互いに近づ
く。)

サフィール (王女に) おいで教会へ、美し
い妻よ。鐘の音も陽気に誘うよ。

伯爵 (手帳を調べ、セリフで) カンタータ、
22番！

全員の合唱 結婚だ！結婚だ！ 素敵なこの
日！ 末ながく幸あれ、この美しい若者
よ！

結婚だ！結婚だ！

(サフィールと王女を先頭に、一行は奥
に向かう。その時、青ひげ登場。)

青ひげ しばらく！しばらく！

(皆また前に出てくる。)

ボベシュとサフィール しばらくとは、なぜ。

青ひげ おわかりでしょう、お話がございま

す、聞いていただかねばなりません。
ボベシュ なんと！ すぐ戻ったものだ。
クレマンティーヌ それに、そなたはわが城
にたった一人で来たのかや。
青ひげ (何とも悲しそうに) きさき陛下！
ああ！
わが苦しみを哀れんでください！ わし
は妻をなくしました。突然のことに！
(全員、動揺する。)
青ひげ ご婦人用のおとなしい馬 (haquenée)
に乗り、妻は並足で進みました。
その運命など、なに疑うこともなく！…
夜は甘やか、森は暗く…
妻は言いました。「ああ！ 今日はいい
天気ね。」
いとしい妻はそこに見えました。森のな
かです。そこで一声高く、叫びを發しま
した。
「わたしは死ぬ！…」と申したのです。
臨終でした！
(いっそう悲しげに)
これは手ひどくこたえました、やられま
した。慣れているとは言え、耐え難いも
のです！
あれのためにわしは、きれいな石碑を建
ててやります…
その仕事はさておき、今に目を向けよ
う！ さあ、男らしく！…
誰もが死ぬのです！ つまるところ、故
人は天国で幸せに過ごしています！
ですが、わたしは…わたしは永らえて、
またもや、やもめです…
この不幸な状態はわたしには目あたらし
いものではありません！
そのとき、心の奥で、泣いているのです、
ああ！
誰のためかって…妻は生きかえっては来
ないのです。

(とても陽気になって) さあ、バラを摘
もう、ちょっとは陽気に、
遺骸のかたわらに詰めこむものを集めよ
う！ 悲しむくそ食らえ！ 快樂万歳！
智恵というに足るのは、なんでも喜んで
受けとることだけ！ 人生は舞踏会！
馬鹿騒ぎにお祭り万歳だ！
(ボベシュに) さて、娘さんはお美しい
ことだ。突然、参りましたが、
お嬢様、お手を取らせてくださいな³。
(皆、驚愕)
ボベシュ わしは寝とるか起きとるのか！
この大胆さがわかるか！
そなたが、娘の手をとろうなどと！…
青ひげ さよう、それこそわが望みでござる、
ボベシュ だめじゃ！
王女 だめよ！
クレマンティーヌと合唱 だめよ！

小唄

青ひげ 1、程遠からぬ山奥に、わしには1個
大隊の騎馬武者と、10門は下らぬ榴弾砲
(obusiers)がある。
そいつを操るのは腕利きの砲手、砲兵に
狙撃兵！
皆 そいつはまるで花束みたいだな。

青ひげ 2、抱えておりますのは、矛つき槍
を持った兵、小銃を持った兵、衛兵の大隊、
槍騎兵に竜騎兵、斥候隊に工兵ですよ。

皆 そいつはまるで花束みたいだな。

青ひげ 要するに、お殿様、お断りなされると、
あなた様でも粉々に吹っ飛びますぜ！
あなたの命はわしの手にあるのです！

³ demander la main 「手を取らせてください」は求婚を表す表現。

伯爵（ボベシュとサフィールに小声で）こりゃ、確からしゅうござりますぞ。

ボベシュ やあ！ わしらの窮地を救うのは誰じゃ。

サフィール（ボベシュに）お望みとあらば、わたしです。

ボベシュ 願ってもない、若者よ、そちの手だては何じゃ。

サフィール（青ひげの方に歩みより）わがいとしの君をあなたから奪うため、悪党のあなたに決闘を申しこみます。皆の前であなたに挑むのは、虚しく苦しむためではなく、死に物狂いに戦うためです。

（伯爵が起きあがり、小姓の手から2本の剣を取りに行く。）

ボベシュ（陽気に）決闘だ！決闘だ！素敵だね！これで気が晴れるというもの！

サフィール（青ひげに）お受けいただけるかな。

青ひげ 受けましょう。無茶な方よ。

（伯爵は剣を1本ずつ2人に渡し、ボベシュの上手に戻る。）

ボベシュ（いつも陽気に）腕のいいものがすべてを取る。勝利するのは君の剣だ。

青ひげとサフィール 天がわれわれの優劣を判断します！

合唱 天があんたたちの優劣を判断します！

ボベシュ（伯爵に）われわれは用心して固まっていよう、

剣が刺さらないように。（2人は下手に下がる。）

クレマンティーヌ（その息子に）わが子よ、わたしたちは場所を開けましょう。（彼女は上手に下がる。）

ボベシュ（サフィールと青ひげに）さあ、二人とも勝負だ！（戦闘開始。）

合唱（決闘者を元気付けながら）それ！それ！それ！それ！

4の構えだ！今度は3だ！串刺しだ！地獄の使者のように、そのよろいを打て！

うまい突きだ！うまいかわしだ！うまい攻撃だ！うまいかわしだ！

それ！それ！それ！それ！

王女とクレマンティーヌ（独り言）天よ

・この子の恋人をお守りください。

・わが

ボベシュ（うっとりして）この出しものはまこと素敵だわい！

合唱 それ！それ！それ！それ！2人の剣はまったく鋭い。

相手を払い、もみくちやになる。2の構え、今度は1だ…フェンシング万歳！

上手なやつは、殺し屋だ。それ！それ！それ！それ！

（決闘の間、小姓たちは清涼飲料水を回す。）

青ひげ（大声で叫ぶ）ああ！警官だ！

サフィール（上手を振り返り）警官か！

（サフィールは青ひげに突かれて倒れる。皆が彼を起こし、長椅子に寝かせる。王女は彼に走りより、長椅子近くにひざまづく。）

青ひげ（冷たく）この突きはわしが剣の師匠から学んだものだ！（剣をぬぐう。）

伯爵 ああ！ちくしょう！みごとな突きだ！

王女（絶望して）あたしの恋人は死んだわ！ああ！ひどいわ！（彼女はサフィール王子の死骸の上に身を投げる。）

青ひげ（ボベシュに）おお、王よ。約束は守られるでしょうな。

ボベシュ もちろんだ！…そちに王女を取らずぞ！〔青ひげに〕あれの手をそちに

与える、[王女に] あの者の心を求めよ。

王女 (サフィールを調べて) ですが、悪魔はこの死すべき者のなきがらをどこで受け取ったのでしょうか。

青ひげ (サフィールに屈みこんでいる王女に) 立ちなさい、王女よ、祭壇へと参ろう!

(時計が鳴り始める。クレマンティヌは娘をサフィールの遺体から引き離し、無理やり青ひげのほうに引きずって、彼の手を取らせる。)

ポベシュ さあ、ご家来衆、位置について歌に戻りなさい。教会では、もっと素敵に、鐘の音がわれらに陽気に呼びかけるのですから!

伯爵 (セリフで) カンタータ22番の繰り返しだ。

合唱 結婚だ! 結婚だ! 素敵なこの日! など。

(お付きの行列がまた並び、半ば気を失った王女を青ひげが連れて行く。オスカル伯爵以外、全員が奥から退場。)

第2場 伯爵、サフィール(長椅子の上に横たわる)、続いて一人の小姓、続いてポポラーニ

伯爵 (一人、サフィールを眺めて) おお、不運な王子よ! …若く、美しく、愛されていても何の役に立とう…じゃが結局、これでどうなるというのじゃ…わたらのような他人、しかも政治にたずさわる人間に泣いている時間などあるのか…(小姓が下手より入場し、伯爵に書きつけを渡す。)

伯爵 (書きつけを読んでから) お前にこの書きつけを渡した者はどこじゃ。

小姓 (下手を指す) そこです。

伯爵 来たのか!

小姓 そこにおいでです。

(ポポラーニ入場。ジプシー (bohémien) の変装。踊りながら舞台を横切り、タンバリン (tanbour de basque) を激しく振る。小姓退場。ポポラーニが入ってくると、場面は一転して最高の速さで演じられねばならない。セリフの応酬も息せき切って切迫した調子とする。)

伯爵 ジプシーめ! …

ポポラーニ いや、懇願いたす者です。

伯爵 ポポラーニ!

ポポラーニ わが君…

伯爵 友だちだ、砕けて話すがいよいよ。

ポポラーニ こちらも友だちとしてお話ししようと思っておるのです。

伯爵 それは重畳。

ポポラーニ 拙者にも、拙者にも重畳でござる! …

伯爵 もっとはっきり説明せい。

ポポラーニ しかし、この男の耳がござる!

伯爵 気にせずともよい。

ポポラーニ つんぼですか。

伯爵 いや、死んでおる。

ポポラーニ ああ、されば…1時間もすれば、わたしの塔に運ばれますな。

伯爵 青ひげ公にな。

ポポラーニ さよう。

伯爵 公の妻とな。

ポポラーニ ブーロットとです…公は拙者におっしゃりました。

伯爵 「あの者は死なねばならぬ」。

ポポラーニ ご存知でしたか。

伯爵 疑っておったのだが、なぜなら今…

ポポラーニ 今…

伯爵 教会におる。

ポポラーニ 誰かを妻にめとるのですか…

伯爵 また妻が一人増える!

ポポラーニ 恐ろしい! 恐ろしいことです!

(タンバリンを振る)

伯爵 静かにせい!

ポポラーニ 御意の通りに。

伯爵 で、なぜタンバリンを持っておるのか
教えてくれるか。

ポポラーニ すぐ、もうすぐに…あの女です
が、わしは殺しませんでしたぞ!…

伯爵 何を申すのじゃ。

ポポラーニ 言うまでもなく、他の5人も殺
してはおりませぬ…

伯爵 では、青ひげの6人の妻は…

ポポラーニ 生きてます…これ以上、生き生
きとしていられませぬわい!

伯爵 では、あの男は…

ポポラーニ 一夫多妻です…これ以上の一夫
多妻はありませぬ!…

伯爵 で、そちの望みは…

ポポラーニ わしは王の足元に身を投げ出
し、6人の不運な女をお目にかけたいの
です。

伯爵 王の足元にひれ伏すとな。

ポポラーニ さよう…青ひげをお裁きいただ
くのです。

伯爵 では王を裁くのは誰じゃ。

ポポラーニ 何をおっしゃいます。ご用心な
されませ!

伯爵 次はわしじゃ!…わしじゃ!…(タン
バリンを奪い、激しく振ってポポラーニ
に向きなおる。)お主に悔いることがあ
るなら、わしにもそれはあるのじゃ。

ポポラーニ 悔いのないものなどございま
しょうか。

伯爵 わしにもな、良心というものはあるの
じゃ。

ポポラーニ 恐くなってきましたよ!

伯爵 あんなことはやめさせねばならぬ!…
この鍵を取れ。(ポポラーニに小さな鍵
を渡す)

ポポラーニ 血のしみですな!…

伯爵 どうしてそう見えるのか。

ポポラーニ そう思ったのです…

伯爵 お主も苦しんだと見える…この鍵で扉
を開け、地下納骨所に参るがよい。

ポポラーニ どこです、その納骨所とは。

伯爵 すぐにわかる。

ポポラーニ 承知いたしました!

伯爵 その納骨所で、5人の男に会うだろう。

ポポラーニ 怖い!怖いのでござります!

(タンバリンを振る)

伯爵 静かにせんか!

ポポラーニ 御意。

伯爵 さて、なぜタンバリンを持っておるか
教えてくれるか。

ポポラーニ それは、この城に…

伯爵 怪しまれずに…

ポポラーニ まんまと…

伯爵 入りこむためか!…

ポポラーニ 6人の不運な女どもにもジブ
シーの衣装に着がえるように言いました
…

伯爵 そして、おぬし自身もジブシーに…

ポポラーニ 変装したのです!…

伯爵 わかった…5人の男は…

ポポラーニ どの5人の男ですか…

伯爵 納骨所にいる5人じゃ。

ポポラーニ ああ!そうでしたね!

伯爵 死んでいると思うか。

ポポラーニ 拙者の立場になってみてくださ
いよ!

伯爵 そうしたいものじゃ。(2人は静かに立
ち位置を入れかえる。同じく早口で切迫
した調子で)死んでなぞいるものか!

ポポラーニ そうですか!そりゃよかった!

伯爵 その者どもにおぬしの後についてくる
ように申せ、そして城の衣裳部屋に参る
がよい。

ポポラーニ そしてジプシーの衣装を…

伯爵 5人分、頼むのじゃ…

ポポラーニ 合点承知でござります…ですが、言うことを聞きますかね…

伯爵 (紙を渡す) これが、命令書だ。

ポポラーニ おお!この紙さえありゃ…(タンバリンを振る。)ですが…

伯爵 まだ何かあるか。

ポポラーニ 1つ悲しいことがあります。

伯爵 何じゃ。

ポポラーニ ジプシー女が6人おるのに、ジプシー男は5人しかおらぬのです。

伯爵 (後じさりして、思いに沈む。)その通り!…その通りじゃ!…(長椅子に倒れこみ、サフィール王子の上に座る。)

サフィール (叫びを上げる) ああ!

伯爵 何じゃこりゃ、何事じゃ。

サフィール (起きあがって座る) ぼくですよ!

ポポラーニ 死んでは、おらぬようすな。

伯爵 そのようじゃ。

ポポラーニ 死んだふりをしていました。

伯爵 知らなんだ。

サフィール (考えこみ) いやあ、死んでなんか、いませんよ!

伯爵 それでも怪我はしたじゃろう。

サフィール (また考えこみ) 怪我。たぶん…いや、怪我もありません!

伯爵 少なくとも、倒れたな。

サフィール はい、倒れましたよ!

伯爵 芝居か。

サフィール そうでなくてどうします!

伯爵 助かったな、それじゃあ…

3人 助かった!…助かった!…(ポポラーニ、タンバリンを激しく振る。)

サフィール でも王女は…

伯爵 結婚式の最中じゃ…

サフィール ああ!止めなきゃ!…(飛びだ

していこうとする)

伯爵 (サフィールを止めて) もっといいやり方を教えられるぞ。

サフィール 何です。

伯爵 この男についていけ。

サフィール どうするんですか。

伯爵 復讐するのじゃ!

サフィール それなら、ついていきましよう!

伯爵 (ポポラーニに) わかったな。

ポポラーニ 委細承知でござる…6人目のジプシー男ですな…

伯爵 すぐにそなたたちと合流する。その時にもっと詳しく指示するからな。

ポポラーニ 駆け足、進め!(タンバリンを振る)

サフィール 駆け足、駆け足!

(ポポラーニとサフィール王子、下手から退場。)

伯爵 (一人で) これで熱烈な使命に燃えた決死隊が出来あがりだ!…こうなったら最後はどこへ行くのか。そんなことは無視してやる…じゃが、それがどうした…わしが他の連中を率いてどこへ向かうことになるかなんてまったく知ったこっちゃないわい!

(婚礼の行列が奥から戻ってくる。青ひげが王女の手を取っている。)

第3場 クレマンティーヌ、王女、青ひげ、ボベシュ、伯爵、家来たち、官女たち、小姓たち。

合唱 結婚だ!結婚だ! 素敵なこの日! 末永く幸あれ、この美しい若者よ! 結婚だ!結婚だ!

(場面の冒頭から、王女は打ちひしがれて母の腕のなかに倒れこんでいる。)

伯爵 (ボベシュに) さて、わが君、すみま

したかな…
 ボベシュ 何たることか、すんじまったわい！ 式次第は完了じゃ…じゃが、こりゃ認めにゃなるまいて…式には陽気さはかけらもなかったぞ、そして今もまだ…見よ…（クレマンティーヌとその娘を指す）
 王女（母に）終わりよ！ おお、母さま、終わりよ！
 クレマンティーヌ わが子よ！…わが子よ！
 …
 青ひげ さてと、ボベシュ殿…
 ボベシュ（彼に近づき）何じゃね。
 青ひげ ちょっとご覧下さい…あなたの奥方とわたしの妻ですよ…城中がこんな具合だ！…注意を他のことにそらさねばならぬようですな…
 ボベシュ でも、どうやって。
 青ひげ あなた様のお好み次第に。
 伯爵（近づき）どうやら、一つ手だてがござりますぞ…
 ボベシュ 何じゃ。申せ。
 伯爵 城にジプシーの一行が参っております…
 ボベシュ そのジプシーどもは何をいたすのじゃ。
 伯爵 ジプシーに何をさせたいとお望みですか…踊りに歌に、占いをいたすのですよ。
 ボベシュ 気に入ったぞ、わたしには占いとやらをしてもらいたい…信じたりはせぬが、怖がらせてくれるのでう！…
 伯爵 それでは、陛下はジプシーに入場をお許し遊ばされますか…
 ボベシュ 苦しくない。ここへ通せ。
 青ひげ お急ぎなさい。
 伯爵（底意をこめて）お静かになされよ、わが君、彼らをここへ連れまいるよう命じて参ります。（奥から退場。）

第4場 クレマンティーヌ、王女、青ひげ、ボベシュ、伯爵、家来たち、官女たち、小姓たち。
 クレマンティーヌ（王女に、彼女を離れたところに連れて行き）お聞き、わが娘よ…これから夫と二人つきりになるでしょうけど、簡単にこういうのよ。「だめ、あなた、だめよ！」これで分かってくれるわ。
 王女（小声で）でも、あたし、よく分からないわ。
 クレマンティーヌ うまくいくように折ってるわ！…行きなさい、ね。
 王女（青ひげのところに行き）わが君…
 青ひげ（感じいって）いとしの婚約者さん…
 王女 だめ！だめ！だめよ！…
 青ひげ（びっくりして）あの…何とおっしゃいましたか。
 王女 こう申しました。「だめ！だめよ！」（母の方を振り返る。）
 青ひげ ああ！そういうことですか！…さて、ボベシュ殿…
 ボベシュ（青ひげに近づき、苦虫を噛みつぶしたように）わしをボベシュとは呼ばんでくれ！…
 青ひげ だって、あなたの名前じゃないですか。
 ボベシュ そいつは変えようと思っとるんじゃ。
 青ひげ ところで、ボベシュ殿、あなたの娘御がわたしに何と言いにきたかご存知ですか。こう申したのです。「だめ！だめよ！」と。
 ボベシュ 娘よ…
 王女 パパ…
 ボベシュ こっちへおいで。（王女が近づいてくる。）あの人にそんなこと言えと言っ

たのは誰だね。

王女 母さまよ。

ボベシュ (呼ぶ) ティティース…

クレマンティース (近づいてくる)ボベシュ
ね…

ボベシュ どうしたんじゃ、奥よ、そなたが
というじゃないか…

クレマンティース そうなの、あなた…神か
けてあなたにはもう1度それを言うとき
が来るわ、あなたにね!…

ボベシュ (怒りくるい) 奥よ!…

クレマンティース それで、何か他に用があ
るの…

ボベシュ ああ! もしわしが自分をおさえ
ていなければ!…

クレマンティース 少しはやってみたらどう
なの!

ボベシュ わしに嘯みついてくることはなか
ろうが!

クレマンティース そうよ、あたしはあなた
に嘯みつくのよ!

青ひげ (小声で) 家来衆が、皆、あなた方
をごらんですぞ、ボベシュ殿!…家来衆
が見てござりますぞ!…

(このいくらかのやりとりの間、4人が集
まって一つのグループとなり、家来全員
が彼らを取りかこむ輪となっている。)

ボベシュ しまった!…ほんとだ!…話の続
きは次の家族団らんの時間を取っておこ
う。

青ひげ (小声で) さよう…あとでな…身内
だけでな…

(外でタンバリンの音。)

伯爵 (奥から戻ってくる) さあ、ジプシー
の一座だよ!…

(ボベシュ、クレマンティース、青ひげ、
王女、オスカル伯爵は上手に移る。奥か
らポポラーニに率いられて6人のジプ

シー男と6人のジプシー女が皆同じよう
に仮面をつけて登場。6人のジプシー男
は、サフィール、アルヴァレス、4人の
城の貴族たち。ジプシー女たちは、ブー
ロットと5人の青ひげの前妻たち。ジプ
シーの男女は2列で前に出てくる。観客
に向かい前列はジプシー女たち。ジプ
シー男のうち、先頭はサフィールで、2
番目がアルヴァレス。

第5場 伯爵、ポポラーニ、青ひげ、ブーロッ
ト、ボベシュ、クレマンティース、王女、
サフィール、アルヴァレス、ジプシーの
男女。
(ジプシーたちの入場で踊りながらの合
唱になる。)

ジプシーたち わたしたち、素敵なボヘミア
[今でいうチェコ]の国から、
今ついたところ。とおとい殿様、よくお
聞きください。歌うたいと歌姫ですぞ。

合唱 この人たちは、素敵なボヘミアの国か
ら、今ついたところ。
よく聞こう、みなみなさまよ、歌うたい
と歌姫だぞ。

ボベシュ (ブーロットに) 歌っておくれ、
わしの心を楽しませるため、
戦の唄か恋の唄を!

バラード ブーロット 1,
あたしらには類まれなわざがある。あた
しら、ジプシーの娘にはね、
目を見ひらいて、未来まで見とおすのさ。
あたしらの歌の教訓を、お聞きのがしな
きよう。よくお聞きなさい、
あなたの手を取ります。そして、ジプシー
女の信仰を、お望みとあらば、

その場でお知りになることができます…
喜んでいて人が泣くのを見ることになり
ます！ 今日、笑っても、明日は泣く、
これが運命の法則だよ！

合唱 今日、笑っても、明日は泣く、これが
運命の法則だよ！

ブーロット 2, 心の底には、恐るべき秘密
がある。それもよくあること。
死ぬほど嫌われている人が、自分は不滅
だとうぬぼれていることもある。
でも運命、この年寄りの悪党は、不運な
人に目を付けている！
わたしも彼らに勇気を奮いたたせようと
する。
その人らは今、退屈な15分をすごそうと
している！…
喜んでいて人が泣くのを見ることになり
ます！ 今日、笑っても、明日は泣く、
これが運命の法則だよ！

合唱 今日、笑っても、明日は泣く、これが
運命の法則だよ！
(ジプシー男女は分かれて位置に付く。
女は下手、男は上手に1列になる。最後
の繰り返しで、青ひげは下手に向かい、
ジプシーたちの後ろを通る。)

ボベシュ さて、1分も無駄にせず始めよう、
占いだよ、それぞれ、占いだよ。

ブーロット (ボベシュに) ご遠慮なくお先
にどうぞ！…お手をボベシュの殿様。

ボベシュ (手を差しだす) さあ、こうじゃ。
(楽隊の音楽。)

ブーロット この手に指は何本あるかね。

ボベシュ (驚き) 指が何本かだと。

ブーロット そうさ。何本かね。

ボベシュ 5本…のはずじゃ…

ブーロット 5本ね…誓うね…

ボベシュ (独り言) こんなことで怖がらせ
てくるのじゃ…じゃが、これがおもしろ
い。

ブーロット 5本か…そしてもし、あなた様
がオスカル伯爵に、「オスカル伯爵…こ
の男は死なねばならぬ！」と、こう言っ
た度に…それを言った度に1本ずつ指を
折っていけば、今日は、王室用フォーク
を持つのにひどくお困りになったのでは
ないですか…

ボベシュ (独り言) この女！…この女は！
…

ポポラーニ 次は誰じゃ、さて、次は誰じゃ。

ブーロット (青ひげに、彼はブーロットに
近づいてくる) あなた様ですか、殿様、
もしよろしければ！

青ひげ (ブーロットに手を差しだす) わし
の運勢は尋ねないぞ。

ブーロット (手を眺めて) きれいな指輪を
手にはめておられますね…

青ひげ 素朴じゃが…趣味がよいだろう。

ブーロット で、指輪に血がついてるのはな
ぜですか…なぜ、血が…

青ひげ 血だって…

ブーロット ご存じないのですか…これか
ら、お話しましょう…それは1時間前、
この指輪は不幸なブーロットのものだっ
たからです、そして何と、不幸なブーロッ
トは毒を盛られて死んだのです。

青ひげ (手を引っこめ) やあ、魔女だ！

ブーロット どうしてこの指輪に血が付いて
いるか

青ひげ 恐ろしい！…恐ろしい！…

(ジプシーたちは恐れをこめて
自分たちのタンバリンを振る。)

ボベシュ では、そこにいる人たちは誰だ。

青ひげ ボベシュ殿、連中を追い払わせなさい！

ブーロット ああ！ああ！怖くなりなさいましたね、殿様！…そしてあなたに理があった。ていうのは、体調のいい死人がいるなら…反対に、まるで病気の生きた人間もいるのさ！（青ひげをつねる。）

青ひげ あいてて！…

ブーロット（ジブシー男女に）仮面をはずせ、さあ！ 仮面をはずせ！（全員、仮面を落とす。一同、誰か顔が分かる。）

青ひげ（がっくりして）あの者たちは！

ボベシュ（同じフリで）あの者らか！

6人の妻たち（青ひげの方に進み、彼を脅かす）怪物め！

青ひげ わしの6人の妻たち！

ボベシュ（自分の下手に近づいてくるアルヴァレスを見て）アルヴァレスか！…

アルヴァレス ひどい方だ！…いったいわたしがあなたに何をしたか…

クレマンティーヌ（アルヴァレスに）あなたはつぐないを受けるわ。

ボベシュ アルヴァレスとそれに先だつ4人の者たちか！…

王女（サフィールだと分かり）あたしの羊飼！…

サフィール わが姫！…

ポポラーニ よくご覧あれ。

青ひげ はて、おぬしは彼らに何をしたのじゃ。

ポポラーニ 電気をかけたんですよ。

青ひげ 悪党め！

ボベシュ（近づいてくるオスカル伯に）そちはわしの命令を実施しなかったのか。

伯爵 してません、殿。

ボベシュ ジャガ、そちはこの紳士方をどこへかくまっていたのか。

伯爵 わしのいとこの女の家ですよ。

ボベシュ ならず者め！

伯爵 でも、いとこが結婚しようとしているもので…おわかりですね…彼女のうちでこの者たちをかくまっておけなくなったので。

ボベシュ なぜじゃ…（青ひげに）ジャガ、この者たち皆を、わしらはどうすればいいのじゃ。

青ひげ わたしが知ったことですか…7人の妻ども！…なんと楽しいことだ！…皆を改めて妻にめとらねばなりませんか。

ボベシュ それもいいが…わしは…この男連中を自由の身にしてやったものの…どうしてやればいいかな。

ブーロット（ボベシュに）どぎまぎすることなんて全然ありませんよ…女が7人…男が7人…数は同じ…

ボベシュ（機械的に繰り返す）数は同じか…

ブーロット なら、だんな、あの人たち皆を結婚させちまえばいいでしょ！ 騎士殿一人一人がお似合いの淑女の手を取り、すぐに結婚するのよ。

ボベシュ 許す！許すぞ！…オスカル伯爵…伯爵 陛下…

ボベシュ 今まで言っていた通りにせよ。

伯爵 お安い御用でござります。

ボベシュ（独り言）わしにはちっとも、わからなかったわい。

（ボベシュ王は上手の1番はしにいたクレマンティーヌの近くに行く。続く合唱の間、オスカル伯爵はエルミア王女を、ポポラーニのところ連れて行く。ポポラーニはエルミアを青ひげの妻たちの先頭に立たせる。彼女らは斜めの1本線に並んでいる。彼女らは次のように並んでいる。王女、エロイーズ、イゾール、ロザリンド、エレオノール、ブランシュ、

ブーロットである。そのわき、上手側にやはり1本線の列に男たちが並ぶ。先頭はサフィール、次はアルヴァレス、4人の貴族と青ひげである。中央には空いたところがあり、そこにポポラーニとオスカル伯がいる。ポベシュとクレマンティヌはいつも上手の1番はしにいる。

フィナーレ 合唱

幸せで、天才的な考え！ 独創的かつ道徳的だ！

(一人ずつ紹介される度、指された人は前に出る。ポポラーニの脇には女たち、伯爵の脇には男たちがいる。)

伯爵 (サフィールを紹介) 第1の殿方！

ポポラーニ (王女を紹介) 第1の奥方！

王女 (サフィールに) あなたにわが心をささげます！

サフィール あなたにわが魂をささげます！

伯爵 (王女に) よろしいかな。

王女 (喜びとともに) うまくいけばいいわ！

…

ポベシュ オップラ！オップラ！ 話は聞いた、そこをお通り！

合唱 オップラ！オップラ！ 話は聞いた、そこをお通り！

(サフィールと王女は2階に上る。)

伯爵 (アルヴァレスを紹介) 第2の殿方！

ポポラーニ (エロイーズを紹介) 第2の奥方！

伯爵 (エロイーズに) これでよいかな。

エロイーズ はい、うまくいけばいいわ。

ポベシュ オップラ！オップラ！ 話は聞いた、そこをお通り！

合唱 オップラ！オップラ！ 話は聞いた、そこをお通り！

(エロイーズとアルヴァレス、2階の王女とサフィールのそばに上る。)

伯爵 (4人のジプシー男を紹介) 4人の殿方！
ポポラーニ (4人のジプシー女を紹介) 4人の奥方！

伯爵 (4人の女に) これでよいかな。

イゾール、ロザリンド、エレオノール、ブランシュ はい、うまくいけばいいわ。

ポベシュ オップラ！オップラ！ 話は聞いた、そこをお通り！

合唱 オップラ！オップラ！ 話は聞いた、そこをお通り！

(4人の殿方と4人の奥方、二階の他の人たちのそばに上る。)

伯爵 (青ひげを紹介) 最後の殿方！

ポポラーニ (ブーロットを紹介) 最後の奥方！

青ひげ (ブーロットに) ほら、ブーロット、これでよしじゃ！

ブーロット あんた、あたしに許してほしいのかい。

青ひげ 心のなかでは、わしはいい子なのじゃ。

ブーロット 極悪人[アナーキスト](scélérat)！ 謀反人！ 山賊！

青ひげ わし、愛されるよう[いいやつになるって] 約束するよ。

ブーロット 誓ってちょうだい、かわいそうな人。

愛ひげ 結婚の誓いを信じてくれるかな。

ブーロット ああ！男って悪賢い！ こんな風に気持ちをもてあそばれていいようにされちゃうのね！

(伯爵は上手に行き、サフィールと王女は下手、エロイーズとアルヴァレスは上手の、舞台前面に出てくる。)

青ひげ わしに関しちゃ、芯(しん)から満足、陽気に終わってくればなあ。

ブーロット (お客に) こんな人ですからねえ [この人の性格はご存知ですね] …

青ひげ (同じフリ) こんな男だからねえ [わ
しの性格をご存知でしょう],
わしは青ひげ, あらちよいと! こんな
陽気なやもめはいない!
合唱 この人, 青ひげ, あらちよいと! こ
んな陽気なやもめはいない!

戯曲『青ひげ』完

翻訳者のあとがき——故岩田信市のオッフェ ンバック歌劇の上演について

本あとがき副題にも示すように、本稿の目的は故岩田信市が劇団スーパー一座を率いて上演していたオペラ作品を紹介することにある。公演期間中に2回以上、観劇するレポートの方も入れて、観客はバブル崩壊後のゼロ年代においても、のべ2千人を超えていたとされる。1公演ごとに総勢20名足らずの役者、スタッフで舞台を切りもりしていた一座のお客として、決して少ない人数ではなかったというものの、2百万人都市名古屋市の人口を考えても、1億を越える日本国民の数を意識しても、公演を目にした人の割合はごくわずかであり、結局、劇場中継などのメディアでの公開も、映像ソフトによる普及もおこなわなかった経緯から、やはりその活動の詳細は、現在では、幻の伝説の霧のなかに消えていこうとしているのかもしれない。訳者は一時、出演も兼ねており、活動当事者の一員なので、おとなしく他日の評価を待つべき立場だが、意外にこうした上演活動が歴史の暗部に葬られて終わる可能性もあるので、岩田の逝去から1年を経過し、そうした忘却の圧力を押しとどめる小さな結界としてこの稿を準備した。

以下では、訳出した戯曲との関係で、岩田の活動を特徴づけるために、岩田の美術、演

劇活動全般におけるオペラ上演の位置づけ、そしてそのなかでもジャック・オッフェンバック作品の位置づけと、世界と日本の歌劇上演史におけるスーパー一座のオッフェンバック、および『青ひげ』[1866]⁴上演の位置づけという2方面から考察を進める。

a. 岩田信市と劇団スーパー一座⁵

岩田は、元来、画家として出発した。エッセイスト、小説家としても、その前衛美術的感性を世に問うた赤瀬川原平と旭丘高校の美術部で活動したのち、盟友、加藤好弘とともに、前衛的な路上パフォーマンスをおこなう「ゼロ次元」という美術グループで活動した。加藤は東京に移り「ゼロ次元」の活動をつづけたが、1970年の万国博覧会に際しては、反万博をかかげ活動したために、あわや警察の取調べを受ける可能性がある状況に陥る。美術館でのアンデパンダン展では、のちのスーパー一座座長となる原智彦のごみの出品が撤去されたことに抗議するごみ裁判の支援者として裁判闘争を闘う。また、1973年には名古屋市長選にヒッピー勢力を糾合して参加する。こうした活動を経て、1976年ごろからは行政や民間のさまざまなイベントに、ロック歌舞伎で、歌舞伎演目を現代風にアレンジして参加しはじめる。

1979年には原座長とともにスーパー一座を結成。当初はレコードと舞台写真のみを参考に、何となくそれらしいものになったという形での上演だったが、やがて大須在住の義太夫師匠と出会い、かつての娘歌舞伎の一座の指導者から所作、フリを習い、娘歌舞伎劇団

⁴ 本文中に引用するオペラ作品初演年を [] 内に示す。

⁵ 以下、全般に美術評論誌『Rear』の岩田の年譜(2018: 126-145)を参照している。

廃業とともに、衣装、小道具などを貰い受け、徐々に芝居としての内容を充実させた。1983年から1987年まで4回の長期海外公演に出る時期を経て、1988年からは、岩田の自宅や劇団稽古場に近い大須演芸場というホームグラウンドでの定期公演を開始する。海外には、最初は、「鳴神」などをもっていったところ、あくまでも日本語で上演するための言葉の壁と外国人にはなじみのない歌舞伎十八番の演目ではもうひとつ受けが悪いということで、2年目からはウィリアム・シェークスピアの『マクベス』『リア王』を歌舞伎風に上演する形で、現地の新聞にも絶賛の劇評が出るほどの人気を博した。帰国後も、ホール演劇として歌舞伎を上演し、短期間の公演の際は、ロックの生バンドが伴奏を担当していた。

すなわち、岩田の演劇活動には、前衛美術家の路上パフォーマンス、歌舞伎のイベント上演、海外公演でのシェークスピア劇の歌舞伎風アレンジ、ホール演劇としての数日間の歌舞伎の上演、大須演芸場での冬の歌舞伎公演をへて、1992年以降、夏にはやはり大須演芸場でオペラ公演に取りくむという発展段階をたどり、活動のバリエーションを増やしていった。

なぜ歌舞伎をやっている劇団がオペラを始めたのかという質問に、岩田はこのように語っていた。歌舞伎は長唄や浄瑠璃などに乗せて舞台上の演者のせりふが入る音楽劇であり、スーパー座では浄瑠璃のチョボを入れることもあるが基本的には、現代音楽やロックに乗せて芝居を見せている。シェークスピア劇を歌舞伎風に直すやり方も大成功であり、ヨーロッパでの音楽劇といえばオペラだから、歌舞伎と同じようにオペラもできるはずだというのが、もともとスーパー座でのオペラ上演を思いついたきっかけである。歌舞伎上演に当たって、先述のように主な役者

は義太夫、日本舞踊を習うことで、演技の基礎技量を養っていたが、オペラでも声楽の指導を受け、バレエ・ダンサーに洋舞も習い、歌舞伎同様に各役者が努力してそれらしい舞台を創っていった。また岩田は画家なので、大道具、小道具の色彩には工夫をこらし、公演会場である演芸場での稽古の最終段階で衣装をつけた状態で役者を舞台に並ばせ、色の取り合わせで衣装を取りかえたり、背景の絵幕の色を塗りかえるなど、舞台上に踊る色彩のダイナミズムを維持すべく、細かいところまで気を使って監督していた。

こうした経緯を考えても、岩田の演劇活動は既成劇団の演出助手からたたき上げて自分の劇団をもつ通常のやり方ではなく、前衛美術の路上パフォーマンスから、突如、演劇に転じて、世界や地域を舞台に観客とじかに対話するように実績を積み、形づくられたものである。劇団組織経営面では、公演ごとに不足する役者をかき集める原座長の手腕も特筆すべきだが、劇でお客の目に触れる表現面では、演出家の岩田が全責任を負い、場合によって稽古場で怒鳴りちらしながら劇団員にカットを入れ、緊張感のあるダイナミックな公演の時間を練りあげていた。

b. 演劇史におけるオフエンバックおよび『青ひげ』の位置づけ

オフエンバックが得意としていた喜歌劇は、現在、悲劇的事件を朗々と歌いあげるオペラに対しオペレッタと呼ばれ、日本では上演の機会が与えられにくいジャンルとなっている。岩田自身は「オペレッタ」という呼称からは距離をとり、もともと19世紀に初演された際にはopéra bouffe, opéra comique, comic operaなどと呼ばれていて、荘重で悲劇的なオペラと軽快で喜劇的なオペレッタという区

別はなかった、また *opéra comique* という呼称は、歌詞と歌詞のあいだのセリフ部分を、オラトリオ的に節をつけて歌うのではなく、しゃべる芝居という意味で使われた用語だといった歴史的理解を根拠に、自分たちの喜歌劇をオペラと考え、「大須オペラ」という呼称を採用し、それは演劇史におけるひとつのカテゴリーともいえるべきものとなった。

日本演劇史と題する書物(諏訪・菅井 1992-1997など)をひもといてみると、古代から明治以前の演劇を神楽、猿楽、能、狂言、歌舞伎、人形浄瑠璃と辿る定型化した歴史観が述べられたあとは、明治期以降のヨーロッパ演劇の移入を中心に、明治から大正にかけてのシェークスピア劇の日本語化の努力、近代劇としてのバーナード・ショーらの紹介、第二次世界大戦後は、サミュエル・ベケットのような不条理劇、問題劇を消化して、オリジナル台本を構成する努力などが語られる。しかし、そこにオッフェンバックやウィリアム・ギルバート&アーサー・サリヴァンなどの、笑える歌劇が論じられるスペースはまったく与えられていない。悲劇としての能と笑劇である狂言が対にして上演され、通し狂言としての歌舞伎には、時代、世話、また気楽に見られるチャリ場などの雑多な諸要素が渾然と一体化して含まれているにもかかわらず、訳者が幼時から親しんできた吉本新喜劇、松竹新喜劇の類も、寄席やホールで演じられる一人芝居としての落語、講談、浪花節、漫談、2人で演じる漫才やさらに人数を増やしたコントの類も、まじめな演劇史で取り上げる素材とは見なされず、演芸史のような別カテゴリーで論じられる。そして、オッフェンバックやギルバート&サリヴァンの芝居は、役者、歌手、伴奏音楽家、場合によってはダンサーなど、多数の人手をかけて上演される手のこんだ芸能であるだけに、一人から数人程度で

上演が可能な演芸の枠にも収まらない。

かといって、それらは日本では例外的にしか上演されない珍奇な芸能だったのかというと、実は、本国で創作、初演された19世紀後半以降、歴史上、2通りの形態で日本でもさかんに紹介、上演され、人気を博していた。

すなわち、1、幕末から明治初年にかけて開港された横浜、神戸、函館などの外国人居留地に住みついたアマチュアや、世界巡演中の旅一座の公演という機会があり、その後、2、大正期に日本にもオペラを定着させようという努力の結果、開始された浅草オペラと呼ばれる諸興行団体の離合集散のなかで、定期的に取りあげられた(升本 [1978] 1986; 内山 1967; 増井 1988; 小針 2016など)。

岩田が最初にオペラに取りくんだのは、戦前に日本で上演禁止処分になったギルバート&サリヴァン作品『ミカド』[1885]についての情報を得て、興味を感じたためだったという⁶。かつて居留地の外国人向けの芝居として明治時代に上演されていたなどの情報も得られたが、台本、歌詞などの翻訳テキストはなく、英国近代劇研究者の升本匡彦の手元にあったピアノ譜を借り、カナダでの上演のレーザー・ディスク(Gilbert & Sullivan [1982])

⁶ 訳者が翻訳で協力する以前の大須オペラ上演作は以下の通り。

1992年 第1回『ミカド』、1993年 第2回『ゴンドリエーリ』、1994年 第3回『ベンザンスの海賊』、1995年 第4回『大須版 三文オペラ』、1996年 第5回『ボッカチオ』、1997年 第6回『カルメン』、1998年 第7回『軍艦ビナフォア』。このうち、第1、2、3、7回がギルバート&サリヴァン作。ちなみに2007年 第16回『カルメン』は再演である。『カルメン』はビゼー作曲だが、台本は本訳稿原作と同じくメイヤック&アレヴィ作であり、この2人の作者が当たり作を生みだす名狂言方であることがわかる。第5回『ボッカチオ』は浅草オペラで「ベアトリ姉ちゃん」という著名な替え歌を生んだ有名作。第4回『大須版 三文オペラ』は言わずと知れたプレヒト劇の背景を、第2次世界大戦直後の闇市風景に置きかえた改作。

1989)⁷についていた字幕を参考に、セリフ、歌詞を書きおこし、歌詞に関しては楽譜の一言に日本語の50音の1音を当てはめるやり方で岩田自身が訳詩したほかに、意欲ある役者には時事的な話題を盛りこんで自由に替え歌にしてよいつ呼びかけ、日本語作詞へのかかわりを促した。

ヨーロッパのオペラ上演では、コーラスやメインの歌手たちは振りつけがなくとも、最小限の舞台上の位置移動に関する演出を受けとめて、自然な身振りとボディ・ランゲージを交えた演技をしている。しかし、日本人のアマチュア役者の集団であるスーパー一座の場合、動作を決めておかないと、完全な直立不動や背筋に芯が通らないぐにゃぐにゃした立ち姿での歌唱となり、さまにならないという理由で、『ミカド』など初期の数作は原座長が、ゼロ次元の前衛美術パフォーマンス、日舞、磨赤児率いる大駱駝艦などと交流し体得した暗黒舞踏などの、エッセンスを踏まえたフリをつけた。やがてオペラの振り付けはバレエを専門とする古川隆一が受けもち、メイン・キャラクターを演じる歌手は、イタリアなどに留学した経験もある声楽指導者に指導を受けて研鑽を積むようになった。⁸

そして1999年のサルスエラ公演『嘆きの聖母』[1930]のスペイン語台本のうち、歌詞のみをCDのパンフレットの英訳詞から訳しなおすという形で、本稿翻訳者の鎌田が手伝いはじめ、次年度からは英仏語台本について、上演用の台本、ピアノ譜、CDなどの入手に関する一切の段取りをつけ、上演候補作の翻

訳を提供するという形でのオペラ翻訳が開始された。

英語なら1幕(または1景)1日、仏語ならその2、3倍程度の時間で訳しおわるので、本業の研究、教育に差しさわるほどの負担もなく、師走歌舞伎と本務校の業務が終わった年末から正月にかけて、その年の課題の翻訳に取りくむのが、わたしにとっても1年の風物詩のようになっていた。

逝去する直前の2018年、岩田は衰えはじめた健康をうすうす自覚して、スーパー一座の評価を後世に残すべく、演劇、美術評論家の方々に執筆を依頼する計画を立てた。そのなかにまじって、特に訳者には、スーパー一座のオペラに関する評価を残す課題が与えられた。その後、遅まきながら横浜居留地での上演活動、浅草オペラの資料に目を通し、スーパー一座のような形でのオペラ、特に喜歌劇の丸ごとの紹介、上演活動は、日本ではきわめて稀だということに気づき、啞然とした。

実は居留地での公演は、ピアノ1台の伴奏での簡略化されたものが多く、浅草オペラの上演は、たとえば長大な『ブン大将(ジェロルスタン女大公)』[1867]の場合でも、だいたいは前後編の2回に切って上演され、楽隊もおそらくは5、6人までで、歌も当時の有名曲に替え歌の歌詞を乗せたもので差しかえるなど、自由な翻案で構成を変更していたようで、上演台本や現場の進行表などの資料が震災、戦災でほぼ焼失しており、詳細は不明だが、原作のオリジナルな台本や歌詞にこだわり、全体を紹介する努力をしていたかどうかは疑わしい。

もちろん、訳者のような専門翻訳家でもない者が、業務の片手間に全訳できる程度の作業量なので、かつての演劇関係者が台本の翻訳を手がける能力に欠けていたなどということは絶対にないと思われる。しかし、なぜか

⁷ 1982年、ストラトフォード・フェスティヴァル(カナダ)における上演記録。映像作品を参照文献に挙げる際、販売時のタイトルを参考にその作品について周知されている劇作家、作曲家を便宜的に著者名とする。

⁸ 『青ひげ』ではタイトルロールを声楽家、若井雄司が演じた。

この分野に関しては、原作の全体像を踏まえて上演しようという動きが、スーパー一座以前にまったく見られなかったらしいことは、演劇界におけるひとつの不思議というほかはない。

岩田は中学生時代から社会研究部に所属する共産主義シンパとして、労働組合の集会で労働者の団結の力を啓蒙する紙芝居の上演に熱中していたといい、またゼロ次元においてもパフォーマンス全体の進行や演出を担当していたとも述べていたので、一見、不定形な集団活動に一定の形を与える天性の才能を持っていたと考えられる。もちろんそれを發揮してスーパー一座の上演作品選定や演出全般を岩田が担っていたのだが、歌舞伎でもオペラでも、長大な台本のうち、時間の関係で1、2幕は省略しても、もともと原作全体を伝える上演の形態に常にこだわり、現在の歌舞伎のように長大な原作のうちの1幕ずつを3つ組み合わせて、3本立て映画の時間を使いながら実質的には有名作の一部ずつをダイジェスト版として上演するというやり方や、名曲だけをメドレー形式で取りだして、セリフ部分は省略し、実質的には原語で歌う歌曲のリサイタルに過ぎないものをオペラと銘うって公演する通常のやり方は、概して嫌っていた。スーパー一座の歌舞伎では、南北や黙阿弥の世話物のセリフが現代劇とほとんど変わらないので変更する必要がなく、オペラはすべて日本語に直して上演したので、多少、メロディに日本語が乗りにくく聞きとりづらくとも、ストーリーも歌詞も大体は理解できるといった形で、いずれにしても岩田の絵画作品同様のカラフルかつダイナミックな色彩、造型感覚で親しみやすい舞台に仕上がっていた。

そしてそうした通し公演として全体を上演するというやり方で浮かびあがってくるの

が、オペラなら19世紀後半のイギリスとフランスの社会自体の猥雑さや活気だし、複数のトリックスターが劇全体を攪乱し、王侯貴族やブルジョワの社交界として回顧的に提示される静的な政治秩序を、転覆させる延々とつづく乱痴気騒ぎである。歌舞伎では、その長大な脚本から18、19世紀の江戸時代の日本が持つ文化的豊かさや、主な享受者だった町人や武士の暮らしのゆとりが読みとられるべきだし、また形式化、様式化した台本において、時折、はっとするように生き生きした演劇的表現を通して描かれる体制転覆や反逆の息吹である。猥雑な混乱のなかに幕を閉じる舞台は、帰途に着く観客たちの心にも、名状しがたい楽しさとして宿り、観劇の何よりのお土産となったはずだが、その混沌とした幕切れ自体に岩田が追求した「ユートピア」のかけらが埋めこまれ、振りかけられ、散りばめられていたといえるだろう。

オーストリアのウィーンに生まれ、パリでの成功を目指して活動をつづけたオッフエンバックだが、彼の最盛期はナポレオン3世が選挙で選ばれた皇帝として君臨した第2帝政期に当たる。20年に及ぶその治世も1871年には普仏戦争に敗れて、皇帝自身が捕虜になるというオッフエンバック喜劇的な形で終わりを告げるが、オッフエンバック自身も、その爆発的喜劇から『ホフマン物語』[1881]の物悲しい世紀末的な叙情に移行して、作品自体を未完成のまま残して世を去った(Rissin 1980=2000)。そして生前のたくさんのヒット作も、変転する時流に取りのこされて、演劇、歌劇界のメインストリームでは忘れられていったようだが、第二次世界大戦後の東ドイツという環境で、ヴァルター・フェルゼンシュタインという大演出家によって再び生気を吹きこまれて蘇り、『パリの生活』[1866]『青ひげ』などは何度も再演されるレパート

リー作品として練りあげられていった⁹。その活気は、1973年にスタジオで収録された映画版（Offenbach [1973] 2001）もあり、幸いに本稿準備中に訳者もDVDで見ることができた。また日本でのオペレッタ推進に取り組み、晩年のフェルゼンシュタインにも師事した寺崎裕則の著作で、フェルゼンシュタイン上演版が歌詞の抜粋、粗筋とともに抄訳、紹介されている（寺崎 1978:249-307）。

前記DVDの字幕もあることだし、それでは訳者の努力は無駄だったかというところ、さにはならず。フェルゼンシュタイン版は、若干、改作されており、フランス語からドイツ語に置きかえる際に、歌詞の細部が変更されている。たとえば、第2幕1景で、青ひげがブーロットを見いだす場面の歌詞が、原文の「こりゃルーベンスだ」の部分が、「アマゾン女も見紛うばかり」になっている（Meilhac & Halévy [1900-1902] : 255, 256=2018:150; 寺崎 1978:255）。岩田は、「おお、ルーブル美術館のルーベンスの部屋¹⁰はすごいだろう。あれこそ芸術だって感じでエネルギーが渦まいてるぞ」などと語るルーベンス信奉者だったので、この歌詞は原詞どおり採用された。たとえこの一点だけでも、新たに全文を訳しおろした値打ちはあったといえる¹¹。

岩田は寺崎の著作により、「口絵の舞台写真見るだけでも、この人がすごいというのは、ひと目でわかるぞ」などと、フェルゼンシュ

タインの重要性は認めており、『青ひげ』映画版のレーザー・ディスクなどもスーパー一座公演の前後に見ていたと思うが、準備段階では、どうせ（訳者の鎌田が）全訳するし、台本はそれから編集するんだから、DVDとかビデオは必要ないということで、翻訳まえにそれらを取りよせる努力はしなかった。またウィーンのワルツのメロディに乗せて、ユダヤ社会の人生のたそがれ、哀歎を表現するスタイルで公演活動していた寺崎の日本オペレッタ協会の活動からも、距離を置いていた。

やはり猥雑な社会の沸きたつエネルギーを、音楽と踊りで激突的、爆発的に表現するというスーパー一座で岩田が目指すテイスト自体に、訳者は改めて注目していきたい。オリジナルの楽曲や台本の製作に岩田は挫折し、百年以上前の戯曲の復活上演を専門にやっていたとはいえ、その上演活動は、古典芸能式に、旧来のやり方を情緒纏綿と再現しようとするものではなく、誰も見たことのない初めての上演法で、エネルギーに満ちた原作から、初演当時以上の迫力を引きだそうとする前代未聞、空前絶後の色と形の洪水だった。

それは、演者の身体と観客の体感を通じて、何らかの異次元の勢力と、この世界にまだ存在しない未知のユートピア領域との新たな契約関係を、結ばせる秘法的な空間の創出であったのではないかとさえ思う¹²。

⁹ フェルゼンシュタインによる『青ひげ』の初演は1963年。横浜ゲート座での初演は1873年。

¹⁰ 蛇足ながら、ルーブル美術館のルーベンスの部屋の連作画を発注したマリー・ド・メディシスに関する皮肉なコメントとして中野（2010:28-43）を参照。

¹¹ ちなみに、2016年2月6、7日、なかのZERO 大ホールにて「東京オペラ・プロデュース第97回定期公演 オペラ・ブーフ『青ひげ』（演出：島田道生）」がおこなわれた。ただしこの公演も、歌唱フランス語、台詞日本語上演、字幕付である。残念ながら、オペラと銘うった公演活動での日本語歌唱という壁は意外に分厚いものようである。

¹² 意味不明の大げさな書き方は岩田の最も嫌うところであり、こうした締めくくりをしてしまうと、異世界のどこかで再会した際、「大げさなことを書いたらだめじゃないか、意味もわからんし」と、口もきいてもらえない危険がある。とはいえ、岩田に私淑する者の客観性に欠けるものいであることを承知で、スーパー一座演劇の特別さを端的に伝える便法として、この未熟な表現をそのまま残しておく。

参考文献

- Gilbert, William Schwenck and Arthur Seymour Sullivan, [1982] 1989, *The Mikado; or, The Town of Titipu*, 『ミカド, または, ティティプの町』(LD, 演出・振付: Brian Macdonald), 東映.
- 鎌田大資, 2018 「見果てぬ「ユートピア国株式会社」の夢を見る——岩田信市さんをしのび, スーパー座の四季を回顧する」『Rear』41:83-87.
- 小針侑起, 2016, 『あゝ浅草オペラ』えにし書房.
- 増井敬二, 1988, 『浅草オペラ物語——歴史, スター, 上演記録のすべて』芸術現代社.
- 升本匡彦, [1978] 1986, 『明治・大正の西洋劇場 横浜ゲーテ座』第2版, 岩崎博物館(ゲーテ座記念)出版局.
- Meilhac, Henri et Ludovic Halévy, n.d. [1900-1902], *Théâtre de Meilhac et Halévy de L'académie Française*, III, Paris: Carmann Lévy, 222-289. (=2018, 鎌田大資訳, 「2006年度大須オペラ, メイヤック&アレヴィ作「青ひげ」台本翻訳(上)——名古屋における演劇社会学の試み資料編」『金城学院大学論集』社会科学編, 15(1):135-164, および本稿.)
- 中野京子, 2010, 『名画で読み解く ブルボン王朝 12の物語』光文社.
- Offenbach, Jacques, [1973] 2001, *Ritter Blaubert (Barbe-Bleue)*, 『青ひげ』(Komische Oper Berlin. 共同監督: Walter Felsenstein & Georg Mielke), ニホンモニター株式会社, ドリームライフ事業部.
- 『Rear』, 2018, (特集「追悼: 大きな岩田信市」) 41:1-145.
- Rissin, David, 1980, *Offenbach ou le rire en musique*, Paris: Fayard. (=2000, 高橋英郎・東多鶴恵訳, 『オッフエンバック——音楽における笑い』音楽之友社.)
- 諏訪春雄・菅井幸雄編, 1992-1997, 『講座日本の演劇』1-8巻, 勉誠社.
- 寺崎裕則, 1978, 『フェルゼンシュタインの芸術——新しいオペラへの道』音楽之友社.
- 内山惣十郎, 1967, 『浅草オペラの生活——明治・大正から昭和への日本歌劇の歩み』雄山閣.